

力を入れましたが、トースターを指でつかんで胸に持つていくことがどうしてもできませんでした。トースターの重さと不安定な姿勢により、トースターの光沢のある銀色の表面をつかむ手が滑ってしまい、リノリウムのタイル張りの床に転がり落ちてしまいました。ガシャン！最悪だ。トースターをゆっくりと持ち上げると、銀色の側面に悲しいへこみができ、黒いプラスチック製の持ち手の「つが外れてしましました。美しい光沢のあるトースターは、もはやピカピカの鏡面はなくなり、そこに映る朝食の風景も見られなくなりました。お化け鏡ようで、奇妙なグロテスクな景色を映しています。

完璧なシルバーアールデコ調のサンビームトースターが壊れてしまつたことを見て、私はひどく落胆し引き裂かれるようなりました。おばあちゃんはすぐ思いましたが、トースターを壊してしまつて、私は怪我がないかを確認に駆けつけて来て私に怪我がないかを確認しましたが、トースターを壊してしまつて私がひどく動搖していることに気が付きました。祖母はトースターを片付けて、屈みこみ、まずは私のお手伝いに感謝し、小さな事故はあつたものの怪我がなかつたことを喜んでいるようでした。私は涙を流し、トースターを傷つけてしまいもう元には戻らないだろうと言いました。ただ、

おばあちゃんは私が真の思いやりの気持ちで行つた努力の方が、トースターの小さなものと壊れたハンドルよりも重要だと、へこみと壊れたハンドルが欠けています。トースターの機能は変わつておらず、次回トーストをするときには、私の秘密の報酬として余分なバターをくれると言つてくれました。『褒美のバターの約束は、トースターを傷つけたという私の落ち込んだ気持ちを和らげ、トースターをも私のミスをきっと気にしないと信じることがきました。

このことを思い返しますと、私の祖母が私に教えていたのは、八正道の一つである「正しい努力（正精進）」ではなかつたのかと思うのです。自分自身や周りの人々のために何かをするときには、真剣に努力をするものだという重要な教訓を今でも覚えています。私が片付けた朝食用のテーブルは、工作のテーブル、お母さんの生け花のテーブル、おやつテーブル、おいしいパン焼きの工房、昼食や夕食のテーブルにもなります。朝食用の皿が片付けられることで、テーブルは他の用途のために使われることが出来るので。おばあちゃんは、私の小さな努力が家族を助け、すべての人々の利益をもたらすことを私に示してくれました。

6年後、私の家にも似たような外観のアールデコ調の光沢のある黒ハンドルのシルバートースターがあり、奇妙なことに側面にへこみがあり、ハンドルが欠けています。トースターを出したり、片付けたりする度に、祖母の精神がまだ私の中に残つていることを知り、仏様の教えを思い出させ、この世界で私を導いてくれます。そして私は今でも、トーストに余分なバターをこつそりと塗り、愛する祖母と彼女から教わった仏法の教えを懐かしく思い出します。トースターの光沢のある銀色の面がデコボコで変に映る景色に見入ってしまいます。おばあちゃんどうもありがとうございました。

言葉では言い表せない感謝を込めて、

エイミー・ワキサカ

伊 井 心



受け継がれるつ
ながりとサン

ビームトースター

祖母のいたことのない人なんていない。私たちには両親がいて、そのまた両親がいて、そのまた…。私は10歳になるまで父方の祖母と一緒に暮らしていました。祖母は典型的な日本人のおばあちゃんで、小さい体で100ポンド(約45キロ)のお米を持ち上げ、ビンの蓋も開け、毎日決まつた服を着て(今でも祖母の着ていた帽子とピン、暗い色のシャツ、分厚いストッキングに黒いオックスフォード式のヒール靴を思い出します)、おいしい料理を作り、孫を溺愛していました。

私の子供のころの記憶では、おばあちゃんが孫である私たちを子どもの様に世話をしてくれていたので、母は用事を済まし、

二〇一九年十一月号

浄土真宗 本願寺派

トロント本願寺

若い赤ちゃんの面倒を見て、お寺でのボランティア活動をすることができました。私は日本語が分からずお婆ちゃんはあまり英語を話せませんでした

たが、どういうわけか私たちはコミュニケーションが取れ、私が何か良いことをしたときや問題を抱えているときも常にわかっているようでした。おばあちゃんにひつひつて家じゅうを廻り、家事や料理をしているのを見ていました。よく私を台所に呼び、本を取り出してよくわからない言葉(日本語)で読んでくれました。その場所は特別な場所でした。怪物や魔魔と人々が戦う姿が描かれている絵本や漫画をよく読んでくれました。ワクワクする絵が広がり、ページ全体にたくさんの場面が描かれています。物語の終わりはいつものお決まりで、いい怪物(日本語では鬼)が悪者を打ち負かし、村に繁栄をもたらすものでした。私にとつて、何の物語かは問題ではなく、おばあちゃんが忙しい時間の合間をぬつて私に読んでくれていたことが特別でした。

今も覚えている最も幼い時の記憶ひとつは三歳くらいの頃のものです。ある日、私はおばあちゃんが朝食の配膳をするのを手伝っていました。お婆ちゃんはそのお手伝いの一つに私がガラスのコップをきちんとした場所(テーブル)へ

置くように指示をしました。もし私だつたら、三歳の子どもにはガラスのコップを置かせる手伝いなんて、絶対にさせません。ましてや、三歳の私自身ならなおさらです。当時の私は食後の後片付けのお手伝いも任されていました。そしてその割り振られた仕事はきちんとやってのけて、非常に簡単な作業であるように思えました。きれいなナイフ・フォークを取り出して引き出しの近くのカウンターに置き、「サンビームトースター」をテーブルから取り出して、キッキンの下の方の食器棚に置きさえすればいいのです。こんな朝飯前よ!

私はまず、誇らしげに汚れたナイフ・フォークを集め、台所のカウンターに置きました。次に、机にまだ残っているナイフ類が使つたものであるかどうかを確認するために椅子に乘つて確認し、自信満々にきれいなスプーンを二つ、引き出しにしまいました。おばあちゃんは、私が指示以上のことまでしたので、上手だねと褒めてくれました。そして最後の作業は、机の上のトースターをつま先立ちで慎重に取り外し、トースターをつかんで戸棚に持つて行くことでした。つま先に